様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２２年　５月２４日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007～2010
課題番号：１９７３０４８７
研究課題名（和文）　新教育の思想の領有に関する比較教育文化史的研究

研究課題名（英文）　The Comparative and Intellectual-historical Study on the Appropriation of A New Educational Theory

研究代表者
岡部　美香（OKABE MIKA）
京都教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：８０２９４７７６

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：教育史

１．研究計画の概要

本研究は、20 世紀初頭の新教育の思想を対象として、当時から現代に至るさまざまな社会集団による思想の領有のあり方を考察するものである。この考察を通して、思想の読者（集団）が構成する社会構造や相互の緊張関係、そして新教育の思想の社会的な布置について解明することを目的とする。

本研究において具体的な研究対象となる新教育の思想は、スウェーデンの思想家エレン・ケイが著した『児童の世紀』（1900）である。この著作は、20 世紀初頭に生起・展開した新教育運動のバイブルとして、当時、世界各国で熱狂的に受容され、その後も 20 世紀を通して読まれ続けた。

本研究では、ケイの本国スウェーデン、ケイの思想をもっとも熱狂的に受容したドイツ、ドイツから影響を受けてケイの思想をやはり熱心に受容した日本において、20 世紀初頭から現代まで『児童の世紀』がどのような読者（集団）によって、どのように読まれてきたかを分析する。この分析を通して、上記のように、それぞれの時代の社会構造や社会的緊張関係、そして新教育の思想の社会的な布置を明らかにする。

さらに、本研究では、思想の受容史について新たな方法論の開発に取り組む。具体的には、フランスの歴史学研究者ロジェ・シャルチエの方法論を基軸に、ミシェル・ド・セルトー、ジャック・デリダ、ジャン＝リュック・ナンシーらの歴史学的方法論、解釈学的方法論を参照することによって、思想の読者による思想の領有を分析するための教育文化史的方法論について精査する。

２．研究の進捗状況

初年度である平成 19 年度は、2 つの具体的課題を達成するべく研究を進めた。1 つには、R・シャルチエ、M・ド・セルトーらの研究成果に拠りながら、また、日本において早くから文化史的アプローチに着目して教育史的研究を行ってきた宮澤康人氏、小林亜子氏の研究も参照しながら、本研究の方法論である教育文化史的アプローチについて精査し、この歴史学的方法論の射程について検討した。もう 1 つには、日本における新教育の思想（エレン・ケイ『児童の世紀』）の領有に関する資料収集を行い、その分析考察を行った。

平成 20 年度も、前年度と同じく、2 つの具体的目標を立てて研究を進めた。まず 1 つには、R・シャルチエが属するフランス・アナール学派の歴史学が有する教育学的意味について検討し、論稿をまとめた。また、フランスの社会科学高等研究所で入手したシャルチエの講義録等の文献や、J・デリダ、J=L・ナンシーらの思想を援用して、本研究の方法論をさらに精査した。もう 1 つには、ドイツにおける新教育の思想（『児童の世紀』）の領有に関する資料収集を行い、その分析考察を進めるとともに、日本における領有のあり方

との比較検討を行った。

平成21年度も、引き続き、2つの具体的な課題設定のもと、研究を継続した。1つには、前年度までに精査してきた本研究の方法論（比較教育文化史的アプローチ）を、従来の教育思想史解釈の流れに位置づけ、あらためて教育学的に意味づけるべく論稿をまとめて発表した。もう1つには、スウェーデンにおける新教育の思想（『児童の世紀』）の領有に関する資料収集を行い、その分析考察を進めるとともに、日本およびドイツにおける領有のあり方との比較検討を行った。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

（理由）

本研究申請時の研究計画調書に、平成19年度の目標「日本における新教育の思想の領有に関する考察」、平成20年度の目標「ドイツにおける新教育の思想の領有に関する考察」、平成21年度の目標「スウェーデンにおける教育思想の領有に関する考察」と書いており、ほぼその計画に沿って研究を遂行できている。

４．今後の研究の推進方策

研究を遂行する上で特に問題が生じているわけではないので、今後も申請時の研究計画調書に基づきつつ研究を進める。最終年度である平成22年度は、これまでの研究成果の総括・総合が課題となる。そこで、学会等の機会を活かして、国内外の研究者にこれまでの成果を検討していただき、研究内容の改善・向上を図る。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

① 岡部美香、教育思想史研究における文化史の可能性、『近代教育フォーラム』（教育思想史学会誌）、第16号、pp. 129-136、2007年、査読無。

② 岡部美香、教育思想の解釈をめぐる戦略・戦術と倫理、『近代教育フォーラム』（教育思想史学会誌）、第19号（掲載予定）、2010年、査読有。

〔学会発表〕（計2件）

① 岡部美香（他3名）、教育関係論の射程、教育哲学会第50回大会、2007年10月14日、広島大学大学院教育学研究科。

② 岡部美香、教育思想の読み／解釈における戦略・戦術と倫理、教育思想史学会第19回大会、2009年9月13日、大阪大学コンベンションセンター。

〔図書〕（計1件）

① 岡部美香（他5名）、子どもと教育の未来を考える、北樹出版、2009年、pp. 12-23およびpp. 46-55。